

“消えない言葉”を求めて

『聖書』に「初めに言葉ありき」とあり、続いて「言葉は神なりき」とある。この表現ほど言葉の偉大さを見事に表現したものは他に無いのではあるまいか。

然し、この“言葉”といふ言葉は、私たちが普通に言ふところの言葉ではない。「言葉を言葉たらしめてゐる“思想”」であって、それは「発音を必要としない言葉」である。

すでに前の章で述べて来たやうに、言葉は“思想”が本体であって、“発音”はその容器である。思想は“精神”とも言はれる。精なる神である。だから、「言葉は神なりき」と言ったものであらう。

鶯あうむや九官鳥は「お早うございます」と、言葉らしいものを言ふことが出来る。しかし、それは“発音”があるだけであって、言葉の本体である“思想”が存在しないから、いくら“言葉”のやうに耳に聞えても、決して“言葉”とは言へないのである。

さて、私たちが今使つてゐる日本語だの英語だの中国語といふやうな“言葉”は、人類がこの世に誕生してかなり長い年代を経てから、その生活上の必要により徐々に作られ、ふえて行って今日に及んだものであらう。

この“言葉”は、第一章で述べたやうに、人間だけに許されたものである。無数に存在する生物の中で、ただ大脳が巨大に発達した人間だけが言葉を覚えることが出来、言葉を使ふことが出来るのである。つまり、人間はその大きな大脳のお蔭で、言葉を覚えることが出来、その言葉の力により霊長となることが出来て、万物の上に君臨することが出来たのである。

然し、この素晴らしい“言葉”にも欠陥があった。それは、発生するや否や“消えてしまふ”といふことであつた。とりわけ大切な言葉は保存して置きたいと思つても、その保存は出来ないのである。また、伝達の範囲も、声の届く所に限られる、といふ制約も欠陥の一つであつた。

だから、人類は、言葉を作つてその偉大な効用に預つてからは、時間的にも空間的にも制約のあるこの“言葉”を、いつ、どこでも受授できるやうにしたい、といふ願ひを懐くやうになつたものと思ふ。

然しながら、その願ひは、数十万年にわたる人類の強い願ひであつたのにも関はず、なかなか果すことが出来なかつた。それで、頭の中に保存するほかは無かつたが、保存したい大切な“言葉”は世代を重ねるにつれてふえる一方であつたから、それも次第に困難になつて行つた。

そこで、権力者たちは、どんなに多くの言葉でも頭の中に貯へて置く

日本語の再発見

ことの出来る、そしてそれを専業とする職業集団を作り、その人たちの頭の中に、いく世代にもわたって、大切な言葉を蓄積させて行ったのである。わが国の最も古い記録である『古事記』が、かういふ職業集団である“語り部”によって語り継がれ、蓄積されたものであることは衆知の通りである。

然し、人類は遂に「言葉を保存する方法」の発明に成功することが出来た。それが「文字の発明」である。文字は、言葉を目で見るものにしたものである。だから、耳で聴く言葉の“聴覚言語”に対して、“視覚言語”と呼ばれるわけである。

言葉が文字で表現されるやうになると、いつ、どこででも、欲するままに自由に受授することが出来るやうになり、人類は文字を使い始めてまだ五千年ほどにしかならないのに、言葉しか使へなかった人類が数十万年もかかって成し遂げた事の何十百倍もの仕事をする事が出来たのである。